

学生による授業評価にみる特徴と課題 ——授業改善のためにできること——

田 実 潔 後 藤 靖 宏 鈴 木 剛
古 谷 次 郎 高 杉 巴 彦

目次

- I. はじめに(問題の所在)
- II. 目的
- III. 方法
- IV. 結果(授業評価にみられる特徴)
- V. 考察(授業評価にみられる課題)
- VI. まとめ

[要旨]

2013年度に本学で行われた、学生による授業評価の最終報告内容を基に、学科別や学年別などいくつかの観点から、集計結果に見られる本学教育の特徴や課題について述べた。担任制を敷いている短期大学部(英文学科, 生活創造学科)や英文学科では、ほとんどの評価項目において他の学部学科より高い評価となっていた。経済学部と社会福祉学部ではほとんど評価において差は見られなかったが、学科ごとの特徴では、経済学科学学生の授業への取組意欲が高かったり、経済法学科におけるユニット制に見られる学生の興味関心を大切にするカリキュラムを反映した評価が見られた。学年進行別集計結果では、大学の3学部において学年があがるほど学生による授業評価があがる傾向が示されたが、短期大学部では逆に1年次に比べ2年次の授業評価が下がる傾向が示された。本研究データからはその理由を特定することはできなかったが、2年次授業で評価が下がる現象について検証をする必要があるかもしれない。履修登録者数別の評価では、やはり少人数授業での評価が高くなる傾向が示されたが、内容的な因子についても今後検討するべきであろう。

I. はじめに(問題の所在)

大学基準設置法の改正により、学士レベルでのFD義務化から今年で7年となる(2008年義務化)。この間、各大学においてはFDに対する取組が種々なされており、特に大学教員の授業改善についても取組が進められている(夏目2008)。一方、文部科学省も「各大学においては、授業の内容及び方法の改善につながるような内容の伴った取組を行うことが望まれること。」(高等教育局長通知2007)として通達を各大学に出しており、大学をあげて授業改善に取り組むよう求めている。

この大学をあげて組織的に取り組む授業改善について、青野(2008)は教員個人ではなく大学が組織として行う「授業の内容及び方法の改善」とは何かを問いつつ、その重要な手がかりとなるのはそれでも各々の教員による「授業の内容及び方法の改善」であり、学生による授業評価やカリキュラム評価を抜きには行えない、と指摘して学生授業評価の再検討について言及している。

学生による授業評価は、どちらかと言えばその有効性を否定する研究が多いが(吉田2010, 松谷ら2005, 安岡2007), 筆者らは隔年で実施されている北星学園大学の学生によ

る授業評価の結果を統計的に詳細に分析比較し、学生による授業評価の妥当性を検証している(田実(2008), 田実・竹原(2009), 田実・竹原・鈴木・岩本・古谷(2010))。学生による授業評価の多くは、得点化するなど客観的数値としては明確であるが、その数値をもって授業改善にどのように反映させていくか、が大きな課題となっていた。松谷ら(2005)は、授業評価アンケートの条件として、実施組織の効率的な運営や専門家の意見をふまえた調査計画およびアンケートの作成、アンケート結果の分析とその検討、担当教員に対する適切なフィードバック、そして学生への情報開示を挙げているが、いずれも教員や事務職員のかかなりの労力を必要とするものであることを示した。

このように学生による授業評価は、その有効性を認める考え方もありながら、本来の目的である授業改善に直結することがほとんど無く、教員や事務職員の負担感が大きい徒労感や実り感の感じられないものと考えられてきた。本学でもその傾向が強く、如何にして学生による授業評価が機能的かつ有機的に教員の授業改善に対する有効情報を提供できるか、が大きな課題となっていた。

II. 目的

本学では隔年で学生による授業評価を行い、その結果は教員個人に示されると共に、全体のデータを集計し度数分布としてまとめている。個人に示された評価結果から、授業改善につながるヒントを読み取ることができるよう配慮した結果であると思われるが、その読み取りについては教員個人間の差があることは否めず、せっかくの評価データが有効に活用されていないことも充分考えられる。そこで、本研究では学生による授業評価の全体像から、学部や学科、前後期の違い、学年進行による違い等々の観点ごとにそれぞれ

の特徴を明らかにし、授業改善への課題を提示することで個人の授業改善だけでなく、大学組織としての授業改善取組の嚆矢とすることを狙いとする。教員個人の授業改善への取組だけでなく、大学組織として授業改善への改善点や改善のための指針等が得られれば、と考えている。

なお、2013年度からの学生による授業評価は、Web上での評価方式であり、自由記述欄も大きく設け、自由記述データから学生の思考傾向や授業改善に直結するキーワードを抽出するテキストマイニングによる分析手法も導入しているが、今回の研究では、5段階評価でなされた数値データのみを対象として検討することとした。

III. 方法

2013年度の前期と後期に行われた学生による授業評価の集計結果を比較検討する。前期に評価の対象となった科目数は754科目で、対象教員数は310人(専任128人, 非常勤182人)、総履修者数37215人、実施率は98.54%であった。後期は対象科目数740科目で、対象教員数は308人(専任120人, 非常勤188人)、総履修者数32793人、実施率は97.70%であった。すべての集計結果は『学生による授業評価アンケート報告書 第18回・2013年度前期』と『学生による授業評価アンケート報告書 第19回・2013年度後期』に収められており、各教員へ配布される他、図書館にも配架されている。

本研究で取り上げたアンケート調査の項目を Table 1 に示す。

これらの9項目について、学部ごと、学科ごと、学年ごと、授業規模ごとの集計データにおけるいくつかの特徴を概観することとした。

Table 1 授業評価項目

①教材(教科書・配布プリント・視聴覚教材・Moodleやe-learning教材・プレゼン教材等)は適切でしたか?
②授業担当者は授業中の良好な環境維持(Ex私語や迷惑行為等)への対応に適切に対応しましたか?
③授業は講義要項(シラバス)の趣旨と内容に沿って展開されましたか?
④その領域への興味、関心が高まりましたか?
⑤授業の内容を理解できるような工夫や進め方がされていましたか?
⑥授業担当者の伝えようとする気持ちや意欲は感じられましたか?
⑦あなた自身の授業への出席状況は良かったですか?
⑧必要な場合の予習・復習や授業時の集中など、あなたの取組態度は意欲的でしたか?
⑨総合的に判断して、この授業は満足できるものでしたか?

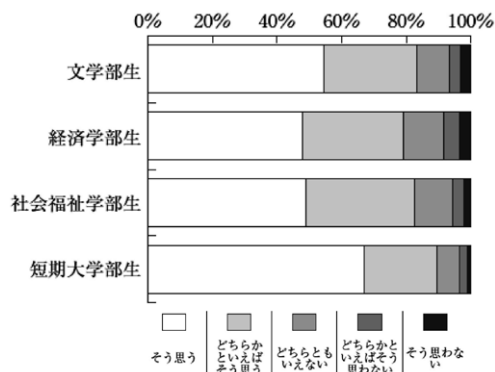


Fig.1-1 学部別総合評価の結果 (前期)

IV. 結果 (授業評価にみられる特徴)

(1) 学部別集計

授業評価項目のうち、全体の傾向を見るため、⑨総合的に判断して、この授業は満足できるものでしたか、の問いに対する学生の評価結果をFig.1に示す (Fig.1-1は前期, Fig.1-2は後期の集計結果)。

総合評価の傾向としては、短期大学部で評価が高く、続いて文学部であり、経済学部と社会福祉学部ではほぼ同じ評価結果であった。この傾向は、他の評価項目においても同様であったが、⑧必要な場合の予習・復習や授業時の集中など、あなたの取組態度は意欲的でしたか?という項目については、前期において経済学部学生の自己評価が社会福祉学部学生より高い結果となった (Fig.1-3)。

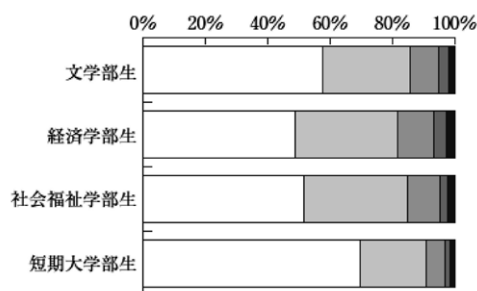


Fig.1-2 学部別総合評価の結果 (後期)

(2) 学科別集計

学科ごとの履修理由の結果の数値をTable2-1~2, グラフ結果をFig.2-1~2に示した。前期, 後期とも共通した傾向として必修科目を設定していない経営情報学科学生の興味・関心に基づいた授業選択の割合の高さ (前期40.01%, 後期37.18%) と、福祉計画学科と福祉臨床学科における資格取得のための授業選択の傾向が見られた。特に福祉臨床学科ではその割合が高かった (前期 計画学科12.65%, 臨床学科21.93% / 後期 計画学科13.10%, 臨床学科25.17%)。短大部では

資格取得のための授業選択の割合がほとんど見られないものの、他の学部学科では一定の割合 (4~7%程度) で資格取得のための授業選択者数が認められた。

また、学科ごとの総合評価についてもFig.2-3~4に示したが、文学部英文学科と短期大学部英文学科および生活創造学科において高い満足度が示された。

学科ごとの授業評価は、他の評価項目でもほぼ総合評価と同じような傾向を示していたが、後期の⑥授業担当者の伝えようとする気

Table 2-1 学科別授業履修の理由 (前期)

	必修	興味関心	資格取得	将来	その他
英文学科生(大学)	38.60%	34.33%	5.84%	10.76%	10.47%
心理・応用コミュニケーション学科生	32.46%	39.00%	3.82%	10.72%	14.01%
経済学科生	48.44%	25.80%	3.92%	9.81%	12.03%
経営情報学科生	23.96%	40.01%	3.93%	14.39%	17.71%
経済法学科生	29.17%	33.52%	4.93%	16.38%	16.00%
福祉計画学科生	34.22%	33.40%	12.65%	8.21%	11.52%
福祉臨床学科生	38.92%	20.94%	21.93%	9.74%	8.46%
福祉心理学科生	34.93%	37.57%	5.88%	6.89%	14.73%
英文学科生(短大)	54.71%	26.05%	1.36%	11.21%	6.67%
生活創造学科生	44.34%	31.18%	2.59%	13.92%	7.98%
その他	0.00%	40.00%	20.00%	20.00%	20.00%

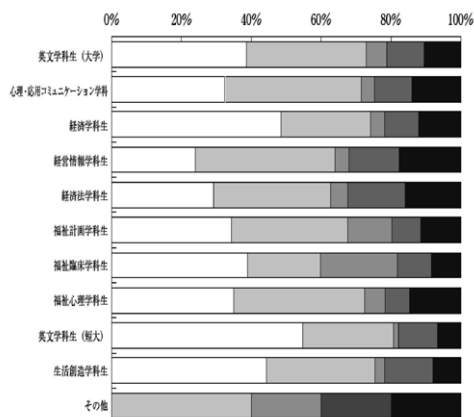


Fig.2-1 学科別授業履修の理由 (前期)

Table 2-2 学科別授業履修の理由 (後期)

	必修	興味関心	資格取得	将来	その他
英文学科生(大学)	45.86%	31.48%	5.06%	10.66%	6.94%
心理・応用コミュニケーション学科生	40.28%	34.01%	3.74%	9.72%	12.26%
経済学科生	52.54%	24.16%	4.02%	8.14%	11.15%
経営情報学科生	37.03%	37.18%	3.34%	11.99%	10.47%
経済法学科生	36.25%	32.22%	4.72%	14.47%	12.34%
福祉計画学科生	45.07%	25.73%	13.10%	9.08%	7.02%
福祉臨床学科生	39.68%	20.73%	25.27%	8.66%	5.65%
福祉心理学科生	45.92%	30.11%	7.20%	7.55%	9.22%
英文学科生(短大)	56.25%	26.24%	1.12%	10.33%	6.07%
生活創造学科生	39.44%	33.80%	2.46%	18.31%	5.99%
その他	12.50%	31.25%	18.75%	18.75%	18.75%

持ちや意欲は感じられましたか? については、短期大学部英文科(75.93%)と生活創造学科(75.69%)が文学部英文学科(74.05%)を上回る結果となった(Fig.2-5)。

(3) 学年別集計

学年別集計結果では、学年進行に比例して、評価が高くなる傾向があった。しかし、短期大学部はすべての評価項目において2年生の

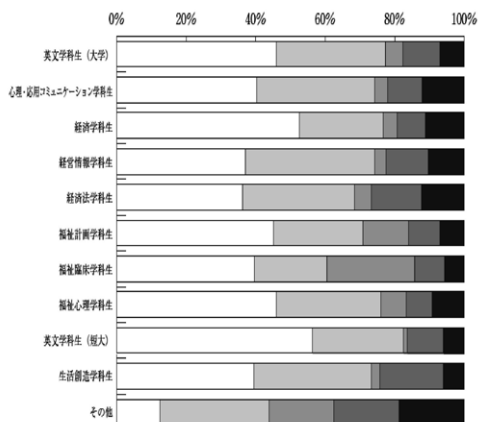


Fig.2-2 学科別授業履修の理由 (後期)

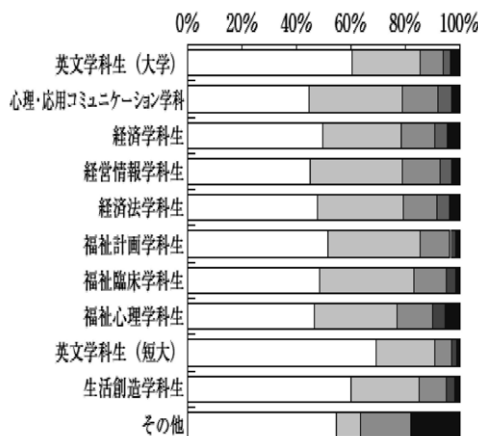


Fig.2-3 学科別総合評価の結果 (前期)

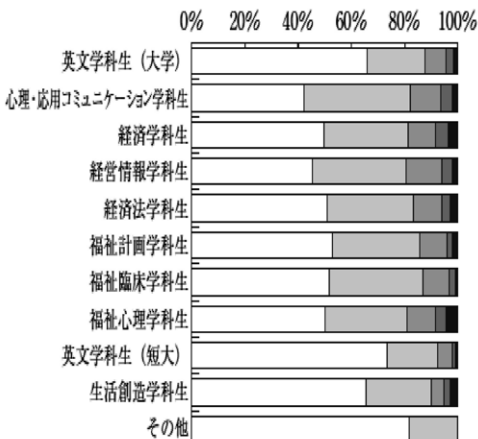


Fig.2-4 学科別総合評価の結果 (後期)

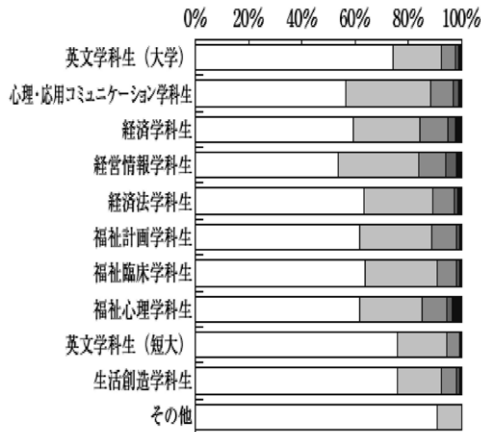


Fig.2-5 授業担当者の気持ちや意欲の結果（後期）

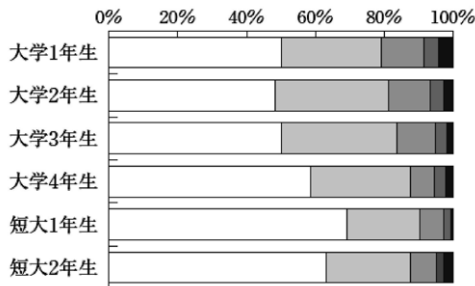


Fig.3-1 学年別総合評価の結果（前期）

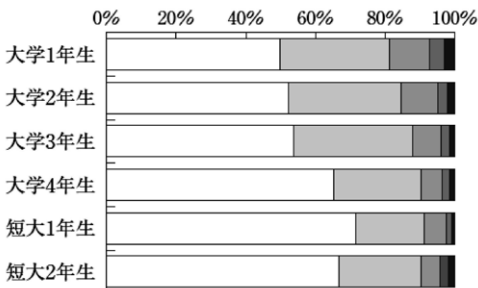


Fig.3-2 学年別総合評価の結果（後期）

評価が低い傾向にあった。これは前期も後期も同様であった。Fig3-1～2に⑨総合的に判断して、この授業は満足できるものでしたか？の結果を示した。

(4) 履修登録者数別集計

受講者数によって区分した集計結果では、受講者数が増える程評価が下がる傾向が見られた (Fig4-1 後期の評価)。ただ、前期

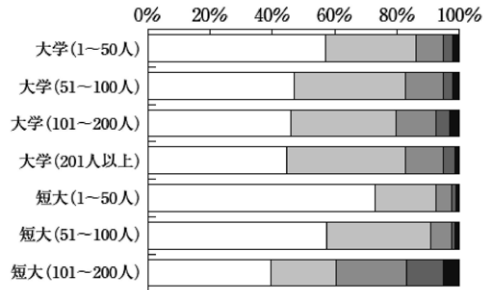


Fig.4-1 履修者別総合評価の結果（後期）

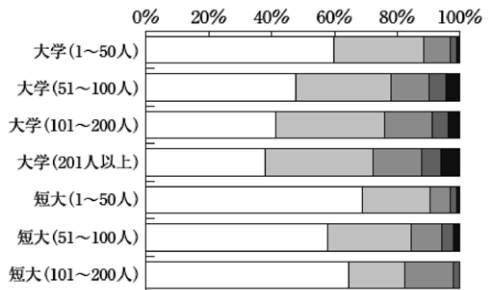


Fig.4-2 履修者別総合評価の結果（前期）

の評価では、短期大学部の101人以上の受講者がいる科目が51～100人の科目より評価が高く、とすれば1～50人の受講者がいる科目と変わらない評価であった (Fig4-2 前期)。カリキュラム上、前期に評価の高い特徴的な科目を設置していることも考えられる。

V. 考察（授業評価にみられる課題）

(1) 学部別集計

文学部と短期大学部の授業評価が高い傾向が示されたが、文学部、短期大学部ともに英文科が設置されており、学科別集計でも明らかのように、英語関係の授業に対する評価が高いことは、英語の北星、といわれるゆえんであろう。短期大学部の高評価はそれだけではなく、生活創造学科も含めた担任制度の効果であるとも思われる。入学時から担任となる短期大学部教員が存在していることは、少人数指導のメリットとともに、学生生活での大きな支えとなることは想像に難くない。田

実ら (2014) は、教員に対して学生の理解を深めるような双方向性のある知的伝達行為として授業を行っているかどうか、との問題提起を行っており、担任制に見られる日常の教員と学生のインタラクティブな関係が大切であると思われる。

また、学生自らの取組態度について、経済学部で総合評価とは異なる特徴を示し、経済学部学生の授業への高い取組意欲が示された。本研究データからは、その明確な理由は明らかではないが、経済学部学生の授業への取組意欲の高さは経済学部教員の授業への真摯な取組姿勢が背後に存在しているのかもしれない。

(2) 学科別集計

学科ごとの履修理由の結果では、経営情報学科学学生の興味・関心に基づいた授業選択の割合の高さ（前期40.01%，後期37.18%）が特徴的であった。経営情報学科は、学科カリキュラムの特徴として、必修科目を設定せず法律学と経済学の興味あるいくつかの分野をまとめたユニットを履修の目安としている。そのため、法律学と経済学の準備されたユニットを自由に選択することができるため、興味・関心に基づいた授業選択者数が多かったと考えられる。学科カリキュラムの特徴を良く反映しており、この特色を活かした学科教育の推進は今後も取り組んでいくべき課題であると思われる。一方福祉計画学科と福祉臨床学科における資格取得のための授業選択の傾向は、主に社会福祉士や精神保健福祉士といった国家試験受験資格に関する授業や教員免許取得に関する授業履修者が多いことを示している。特に福祉臨床学科は、社会福祉士受験資格の取得に力を入れており、ここでも学科教育の特性が如実に反映された結果となっている。

(3) 学年別集計

予想された通り、学年が進行するにつれ授業への総合満足度は高くなっていくことが示

された。学年進行に伴い専門科目が多く配置されるようになってくるので、当然の結果であろう。ただ、担任制を敷いて学生との関係性が密であると思われる短期大学部では、1年生より2年生での評価が下がる傾向にあった。2013年度単年度での検証で結論を出すことは難しいが、このデータを見る限り短期大学部では2年生への授業時の配慮や支援が今後必要になってくるかもしれない。

(4) 履修者数別集計

少人数クラスでの指導効果については、一般に良く指摘されており、本研究データでもその効果を裏付けするような結果が示された。但し、短期大学部において2013年度前期のみ101名以上の受講者がいる授業に対する評価が51～100名の受講者がいる授業に対するそれよりも高くなっていた。他には見られない傾向であるが、本研究データからはその詳細の理由についてエヴィデンスのある言及をすることができない。短期大学部の2013年度カリキュラムを確認したところ、受講登録者数100名を超えている授業は1科目だけであった（アセンブリⅠ）。関係者へのヒヤリングによると、必修授業で学生の興味関心をもとに授業展開上の様々な工夫を設けておられるようであった。これらの工夫を、大学全体で共有できるシステムや取組があれば、大学授業改善に大きなメリットとなることは間違いなく、今後の課題となるであろう。

VI. まとめ

林 (2009) は、学生による授業評価の結果と教員自身による自らの授業評価の結果を比較分析し、教員が直観的に「うまくできた」あるいは「ダメだった」と感じる（評価する）授業については、ほぼ学生による授業評価と一致する傾向があることを示しているが、今後は学生からのみの評価ではなく、教員自身による自己評価もデータとして分析評価す

ることで、授業改善へのヒントが得られることと思う。本研究では、学科カリキュラムの特色を反映した評価結果も特徴として見られたが、学科カリキュラムと学生評価との関係性について分析することも有効なことであろう。またいつも問題となる学生自身の受講態度や取組態度については、田中ら（2003）が述べるように、教員が良い授業を展開していくことが学生の受講態度につながるという因果関係を認めつつ、今回の特徴にあるように、経済学部での学生の授業への取組意欲の高さによって、教員の授業への取組も改善・向上していくことも考えられる。良好な相互関係を構築しながら、授業改善を行う一つのモデルとして今後の経済学部学生の受講態度や取組態度に期待するところである。

〔謝辞〕

本研究は、北星学園大学2013～2014プロジェクト研究による研究助成を受けた研究成果の一部である。北星学園大学に感謝する次第である。

〔文献〕

- 夏目達也（2008）：FD実施義務化が提起しているもの—諸外国との比較による若干の知見—。大学教育学会2008年度課題研究集会要旨集，38-39。
- 文部科学省大学設置基準等の一部を改正する省令等の施行について（2007）：文部科学省 高等教育局長通知（文化高第281号，平成19年7月31日）
- 青野透（2008）：大学設置基準における「授業の内容及び方法の改善」が意味するもの。第11回日本高等教育学会Ⅱ-7部会，120-121。
- 吉田雅章（2010）：学生による授業評価は廃止すべき。第16回大学教育研究フォーラム，86-87。
- 松谷満・平井松牛・佐竹昌之・桑折範彦（2005）：全学共通教育の現状と課題—学生による授業評価アンケート調査の分析から—。大学教育研究ジャーナル，Vol2，13-25。
- 安岡高志（2007）：学生による授業評価の進展を探る。京都大学高等教育研究Vol13，73-87。
- 田実潔（2008）：学生による授業評価と授業改善—学生評価の再分析から—。第30回大学教育学会発表論文集，106-107。
- 田実潔・竹原卓真（2009）：学生による授業評価に基づいた授業改善への探索的研究（Ⅱ）—学生が望む授業づくりに向けて授業評価アンケートの分析から—。北星学園大学社会福祉学部論集，vol46，65-72。
- 田実潔・竹原卓真・鈴木剛・岩本一郎・古谷次郎（2010）：学生による授業評価に基づいた授業改善への探索的研究（Ⅲ）—過去3度のアンケートの縦断分析から（2003-2007）—。北星学園大学経済学部北星論集，vol49（2），1-16。
- 松谷満・平井松牛・佐竹昌之・桑折範彦（2005）：全学共通教育の現状と課題—学生による授業評価アンケート調査の分析から—。大学教育研究ジャーナル，Vol2，13-25。
- 田実潔・鈴木剛・岩本一郎・古谷次郎・後藤靖宏（2014）：授業改善に直結する学生授業評価の検討（Ⅱ）—新学生授業評価アンケート調査の策定に向けて—。北星学園大学社会福祉学部北星論集，Vol51，81-90。
- 林創（2009）：学生の授業評価と教員自身の授業評価の一致と不一致。第15回大学教育研究フォーラム，40-41。
- 田中あゆみ・藤田哲也（2003）：大学生の達成目標と授業評価，学業遂行の関連。日本教育工学会論文誌，vol 27（4），397-403。

